

『聖人か盗賊か』—原抱一庵の死—

川戸道昭

日露戦争も次第に激しさを増していった明治三十七年八月、抱一庵・原余三郎は東京巢鴨の精神病院においてその波乱に満ちた生涯の幕を閉じた。享年三十九歳。友人、知己だれ一人として臨終に立ちあったものはいない。かつて森田思軒門下に抱一庵ありといわれた気鋭の作家のなんとも淋しい末期であった。

抱一庵の死は、単に彼一個人の作家活動の終りを意味するだけではなく、明治の文学史の上からみると、それはある一つの文学流派の終焉をも意味するものであった。つまり彼の死は、森田思軒が始め、抱一庵が受け継いだ、例の周密体と称されるあの一種独特な文体を用いた翻訳文学が、新興勢力の批判にさらされて社会から葬り去られるということを象徴的に物語るものでもあったのだ。この抱一庵の死の背景にある文学史的な意味に注意を向けた者は彼を直接知っていた文士にも、その後の批評家にもいない。すべて原余三郎という極めて特異な人間の自ら招いた悲惨な結末という解釈でかたづけられてきた。彼のあまりにも強烈な個性と波乱に満ちた生涯を考えると、それもやむをえぬことであったかもしれない。しかし、真の評価がなされないというだけならまだしも、今の西洋文学の移入史などを繙いて、「原抱一庵という明治中期の翻訳の大家」は「人に誤訳を指摘されて自殺をとげたという話だ」（吉武好孝『翻訳事始』）といった事実とは異なる伝聞めいた話が載せられているのを目にすると、やはりここでもう一度、抱一庵のためにも、彼の晩年の文学活動をきちんと整理し、その死のもつ意味を改めて問い直してみる必要を痛感させられるのである。

『闇中政治家』という創作や西洋の小説の翻訳が世間の注目を集め一度は文壇にその名を博した抱一庵であったが、酒を飲んでは無責任な言動を繰り返す放恣な生活態度がたたって、次第に仲間から見放されていく。世間からもだんだん相手にされなくなって、一時彼は文壇から完全に姿を消してしまう。そんな抱一庵がある時突然復活する。明治三十三年五月から十一月にかけて東京朝日新聞に発表した『聖人か盗賊か』という翻訳が意外な評判を呼んだのである。「人気といふものは妙なも

んで、名が古くなると飽きられるが、暫らく隠れて出直すと復た新人の如く迎へられる。……抱一も亦一端葬むられた死灰の中から蘇生つたので、『聖人乎盜賊乎』は意外の評判とな」った、と内田魯庵は復活の原因を分析している。

『聖人か盜賊か』という作品はその後、前後二冊の単行本として刊行されるに及び益々世間の注目を集めていった。後篇の巻頭に付されている「本書後篇発梓の折に」という一文には、明治三十六年三月発行の前篇は「発兌後二十五日にして初版二千尽き、更に十五日にして再版一千五百尽き、竟にまた増版三千を出すの運を見るに至れり」と、大変な売れ行きであったことが記されている。これはあながち誇大宣伝でもなかったようで、私の所有する前篇二冊、後篇一冊の奥付けは、それぞれ前篇は初版と再版、後篇は三版とあるし、前篇は四版も出たことを示す本もある。初版発行後数か月で四千五百部以上を増刷するというのは当時としてはやはり好調な売れ行きであったとみるべきだろう。

実はこの『聖人か盜賊か』という書物には、世間の注目を集めるだけの理由があった。それはこの書の巻頭を飾る文豪大家の序文ないしは跋文である。我々はまずその数の多さに圧倒される。ざっと数えてみただけでも、前篇には合計二十一名の序文、頁数にして四十頁、さらに後篇でも、前篇とはまた違う名前の二十六名の序文と跋文、頁数にして三十四頁、前後合わせてなんと四十七名、七十四頁もの序文や跋文が掲載されているのである。しかも、そこにあるのは矢野龍溪、森鷗外、徳富蘇峰、黒岩涙香、泉鏡花等々、当時の一流の文豪大家の名前である。これが世間の注目を惹かないはずはなかった。「此書は実に空前絶後の書である、世界各国を鉄[かね]の草鞋で尋ねても、如斯[こんな]に序文のある本は無い、此本の売れるのも、必竟序文のお陰」であると抱一庵本人も、自分の狙いがまんまと当たったことに満足の様子であった。

しかし本人は得意であったかもしれないが世間は必ずしも好意的な見方をするものばかりではなかった。中にはこの書を称して「序文文学」というものもあった。「聖人か盜賊か、序文か本文か」と皮肉るものもあった。また、ある雑誌には「抱一か狂人か」という酷い悪口さえも載った。それを見た翌日、抱一庵は前田曙山のところへ行って「ホロホロ涙を翻[こぼ]して、怒るといふよりも、寧ろ口惜しがつ」という。もともと世間の評判を人一倍気にする抱一庵であったが、それにしても、この『聖人か盜賊か』の評判に対する彼のこだわり方は少々異常とさえ思わ

れるほどであった。新聞や雑誌に掲載された同書の批評は一字一句違えず全部諳んじていたというし、同様にそれが東京の本郷座で新演劇の一派によって演じられたときには、自ら本郷座に赴いて、栈敷、土間となく往来して、一人たりともこの劇を是非するものがあるのを聞いたならば、直ぐに掴まえて議論を仕掛けた、という遅塚麗水の目撃証言も残されている。

彼がそれほどまで世評を気にしたのは、必ずしも彼の性格のせいばかりではなかった。実はこのとき、抱一庵ならずとも、世間の評判を気にかけずにはいられないようなある深刻な事件がもちあがっていたのである。『聖人か盗賊か』の前篇が順調な売れ行きを示し、後篇の方も間もなく発刊されようという四月六日、抱一庵は東京朝日新聞に米国のマーク・トウェインの短篇を翻訳した「該撤惨殺事件」を発表した。その発表自体、世間の批判を浴びるようなことはなにもなかったのだが、問題はその後である。前作において味をしめた抱一庵は、この小文に対しても文士数名に往復はがきを発送して再び批評の言を求めるといふ二匹目のどじょうを狙いにかかったのである。これには当時の文壇大家も困惑した。前作のときはまさか四十七名もの中の一人として宣伝材料に使われるなどと思ひもせず快く引き受けた文士たちも、そうそう抱一庵のちょうちん持ちばかりしているわけにはいかない。

「仏の顔も三度、鰻の蒲焼も二度続きては聊か鼻に付くものあり」と露骨に反感を示すものがでてきた。十年来抱一庵と親交のあった山県五十雄などもその一人で、今度ははっきりと「貴下の筆は……トウエーンの文の如き滑脱洒落のものを訳するには寧ろ不向きなるべきかと愚考致し候」と腹蔵のない批評を書き送ったのである。後輩作家の忌憚のない批判を素直に受け入れるだけの心の広さは慢心した抱一庵にもとよりあろうはずはなかった。彼は、四月二十日の朝日新聞に山県の書簡を掲げ、紙面のほぼ一頁を費やしてその反論を展開させる。しかし、こと英語に関するかぎり、山県は抱一庵のかなう相手ではなかった。山県はすぐにその批判に答え、抱一庵最大の泣き所を突く攻撃に打って出る。「失礼ながら該撤惨殺記事の貴訳を原文と対照致し候に、殆ど逐字訳と御告白ありしにも拘はらず、所々数句脱し居れる所もあり、こゝかしこ甚だしき誤訳の見当るは頗る遺憾に候」。世にいう山県、抱一庵の誤訳論争のはじまりである。抱一庵にはこの山県の反論に正面から答える術はなかった。彼はうやむやのうちに論争を打ち切ろうとする。しかし山県の方はそれではおさまらない。彼はその頃自ら発行していた『英文学研究』という小冊子の第六

冊目を、急遽予定を変更して「該撤殺害」にあて、原文と自分の訳例を掲載する一方、抱一庵との論争の経緯を詳述し、併せて抱一庵の誤訳箇所を逐一列举しながら彼の杜撰な翻訳姿勢を徹底的に告発糾弾したのであった。

抱一庵はこの執念深い山県の攻撃にあってみるみる自信を喪失していく。本郷座の棧敷や土間で誰かれなく議論を仕掛けたというのも、自分は世間の笑い者になっているのではないかという疑心暗鬼にさいなまれた結果の虚勢の行動であったようだ。酒量も増えたのだろう。奇行が目立ち始めるのもこの頃からである。彼の繊細な神経はこの短日月のうちに経験したあまりに激しい浮き沈みにとても耐えうるようなものではなかった。朝日新聞の訃報も伝える通り、彼はこの年の秋頃から病に罹り、翌年一月入院、同年八月ついに帰らぬ客となる。

抱一庵の死は一部でいわれるように自殺によるものではなかった。魯庵の証言によれば、入院直前にそういうことを試みたということだが、それはむしろ彼の病ゆえの常軌を逸した行為と見るべきだろう。正常な判断能力の存するかぎり、彼は必死に生きようとしていた。己れの名譽を守るために、毎日のように本郷座に出向いて相手構わず議論を仕掛けたというのも彼が必至に生きようとしていた証拠である。その「狂熱の為に身を忘れ」、それが「彼の病気を募らしめ、はた死に近よらしめた」と遅塚麗水は彼の死の原因を分析している。

作家としての活動の上から見ても、彼の死は、自殺というより、むしろ果敢に戦いに挑んだ結果の討ち死と見る方が当たっているように思う。彼は敢然と戦いに挑んだが、彼の旧式の文学観では、明治三十年代の知識や理論にはとうてい太刀打ちできなかった。三十年代ともなると翻訳文学に対する読者の期待も識者の考え方も一変する。単なる意識や紹介では済まされない時代になったのである。こうした状況の中で、抱一庵は旧式の文学観を懐いたまま、思軒の威光を頼りに、文壇に復活を図ろうと試みる。しかし、その時代感覚のずれはいかんともしがたいものがあった。彼の訳したのが、リットンの『聖人か盗賊か』（原題は『ユージン・アラム』）という明治十、二十年代を象徴するような作品であったということが、彼の頭の旧さをなによりも端的に物語っている。二十年代の空気の中で育った翻訳家や作家が、三十年代になっても変わらずにその作家活動を続けていくというのは恐らく奇跡に近いことであつたらう。それは鷗外や逍遙のようにずばぬけた才能の持ち主か並外れた努力家にしてはじめてなしうることであった。思軒は死に、二葉亭は国外へ去

り、魯庵は文壇を離れた。一人抱一庵のみが復帰を果たしたかに見えたが、結局それは、彼の旧さを世間に印象づけるだけの結果に終わったようだ。それだけならまだしも、非難は彼の師匠の思軒の作品にまで及ぶという思わぬ結果を引き起こした。思軒の翻訳（米国ナサニエル・ホーソンの「デイヴィド・スワン」の訳）までもが、桜井鷗村というこれまた原典重視の英文学者から、「原文の語句を誤解したり、また折角 Hawthorne が骨を折って書いた処が、往々省略してあるので、之を原文と対して読めば失礼ながらまことに拙い訳文と云はねばならぬ」（三十六年八月、『英文新誌』四号）という手厳しい批判を浴びることになったのである。

しかし、思軒や抱一庵の翻訳は、なるほど三十年代の英文学者の目から見れば時代遅れの感は否めなかったかもしれないが、二十年代には彼等の作品は西洋文学の翻訳の在るべき一つの姿とさえ見なされて、人気を博したという事実も我々は忘れてはならないと思う。逍遙は思軒を「英文如来」と称え、四迷は彼の『探偵ユーベル』を愛読書の一つに加えていた。泉鏡花は学業を忘れるほど夢中になって『盲目の使者』を読み耽り、正宗白鳥は『懐旧』を通して西洋文学のおもしろさをはじめて知ったという。偉大なるかな思軒の文学である。抱一庵が思軒の作品に初めて接したのは、なんと札幌農学校における大島正健の授業であったというのだから、その全国への浸透ぶりも察せられようというもの。大島の授業がきっかけとなり、抱一庵は思軒の作品にのめり込む。これはまだどこにも紹介されていない資料だと思うが、明治十九年の札幌農学校の英文の『年報』によると、原余三郎は予科最下級の二十一名中二番という優秀な成績であった。それが、大島の授業で思軒を知り、その作品を「三日三夜一睡もしない」で読み耽るということを繰り返した結果、翌年には数学が落第点となって、挙げ句の果は学業に嫌気がさして退学してしまう始末。大島も罪づくりなことをしたものだ。いや、見方を転ずれば、彼は作家・原抱一庵の生みの親ということもできるかもしれない。抱一庵は学校を去り上京して思軒の門下に加わった。そして、その後の思軒・抱一庵の活躍は明治文学史などで見る通りである。

『聖人か盗賊か』に寄せた森林太郎の序文にはこうある。「邦人の外国小説を訳するものに二様の文体あり。一は国文をもて基礎となし、一は漢文をもて標準となす。今の……訳文は彼を取りて此を取らず。……思軒居士の逝きてより今に至るまで能く其遺響を継ぐもの少きはさらなり……独り我抱一庵主人原君は漢洋の語に兼ね通

じて、其の西文を訳出するや、或は雄渾に、或は莊重に、彼の漢文の諸長を取りて、而かも人をして些の艱澁を覚えしめず、世に能く思軒居士の衣鉢を伝ふるものと称するも亦宜なり……」。

抱一庵の死は、一時期明治の文壇に隆盛を誇った「漢文をもて標準となす」翻訳文学の終焉を意味するものであった。